

# 小児副鼻腔炎について

副鼻腔炎＝蓄膿症は風邪をこじらして悪化した状態。早期の治療が大切だ。

早期に適切な治療をすれば  
2〜3週間で改善する



副鼻腔炎というより蓄膿症ということばをよく耳にするが、副鼻腔炎とはすなわち蓄膿症のこと。今は薬などで比較的簡単に治る病気。昔前は蓄膿症と聞くと、長引く病気で治らなければ手術をすることもあった。イメージがあったが、小児の副鼻腔炎の場合、薬や技術の進歩で早期に適切な治療をすれば2〜3週間で改善する病気になっている。

副鼻腔とは鼻の周囲の骨にある空洞で、上顎洞、前頭洞、篩骨洞、蝶形骨洞という骨の空洞がいくつかあり、これを総称して副鼻腔と呼ぶ。風邪などをひくと鼻の粘膜が腫れて副鼻腔の開口部がふさがりやすくなるため、病原菌の侵入などで副鼻腔の粘膜に炎症が起こると、粘液や膿が排出されず、副鼻腔にたまりやすくなる。副鼻腔のなかでも主に上顎洞や篩骨洞にたまりやすいため、この副鼻腔に膿汁がたまることを副鼻腔炎と呼ぶ。

副鼻腔炎には急性と慢性の2つのタイプがあり、簡単に言うと風邪の延長線上にある病気で、いずれも子どもにはよくある病気。風邪が治ったのに鼻がぐずぐず、黄色い鼻汁が出ていたといった時点で副鼻腔炎について、「イエローカード」が出ていていると思っしてほしい。その場合は速やかに耳鼻咽喉科に行く必要がある。

こともある。治療は急性副鼻腔炎の治療と同様、経口治療などが中心となる。家庭では鼻の清潔を保持し、換気を良くしておくことが、副鼻腔炎の予防と治療に大切。鼻のかめない乳幼児では保護者による鼻処置は重要だ。外来では鼻汁吸引、あるいはネブライザー（吸入）などを行う。鼻がかめない乳幼児の場合は、お母さんが吸引を行うのが良い（市販の吸引器具でよい）。鼻をかめる幼児の場合は、静かに鼻をかませよう。圧力の関係で副鼻腔や中耳に病原菌が侵入してしまうケースもあるため、激しくかむのは厳禁。

## 副鼻腔炎から中耳炎に移行するケースもある

風邪を引き、こじらせて副鼻腔炎に移行し、さらにそれが中耳炎になるケースがある。これは、上咽頭（鼻と咽の間）の病原菌が耳管という鼻の奥と中耳を交通する管を通って中耳に侵入することによって起こる。幼児の耳管がまだ未発達なため、太くて水平になっていることにより、病原菌が耳の中（中耳腔）に侵入しやすいからである。乳幼児の場合、寝かした姿勢でミルクを飲ませると中耳炎になりやすいが、これは耳管に入ったミルクと共に病原菌も一緒に中耳に流れるためだ。鼓膜の外側から病原菌が侵入することは絶対に無く、お風呂やプールで耳に水が入ってもこれが直接の原因で中耳炎になることはない。

治療は副鼻腔とほぼ同じ病原菌なので、これに対して同様の抗生物質が使われる。急激な耳痛があるため、鎮痛剤も必要になる。また、中耳腔内の炎症性分泌物が増加すると鼓膜が著明に膨隆して激しい痛みを伴ったり発熱する。自然に破裂して耳だれが出てしまえば軽快するが、そうでない場合は鼓膜切開が必要になる場合もある。鼓膜切開をする前に、聞えの検査と鼓膜の動きを点検するティンパノメトリーという検査を実施することもある。鼓膜が破裂したり鼓膜切開のあとは耳だれがあるが、この際は点耳や耳処置を行なう。鼓膜切開と聞くと、怖いイメージがあるが鼓膜は再生能力が極めて高く安全な箇所なので何回切開を受けてもほとんど心配はなく、難聴が後遺症として残ることもほとんどない。

## 副鼻腔炎に似ている病気「花粉症」

厚生労働省のホームページ「平成19年花粉症対策」によると全国を対象にした疫学調査が2002年に行われ、15歳以下の小児の花粉症は10.2%で、0〜2歳が0%、3歳から5歳が4.5%、6歳から9歳が10.5%、10歳から12歳が12.1%、13歳から15歳が15.1%で、増加の傾向があると考えられている。以前は花粉症は大人の病気だ、10歳以下はならないと言われていたが、ここ数年でますます増加傾向にあるようだ。これは生活環境や食生活の変化などによるものではないか、と言われているが原因はまだ特定されていない。

花粉症は、鼻がぐずっているのに検査をしてもらっても病原菌が見えられず、代わりに鼻汁中に白血球の一種である好酸球の増加が認められる。風邪や副鼻腔炎と花粉症の症状は大変まぎらわしく、多くの場合はじめめ風邪をひいたと思っってしまう。花粉症の症状は「くしゃみ、鼻水、鼻づまり」が特徴だが、これにかゆみなどが加わることが多い。

花粉症という和本州ではスギ花粉が有名だが北海道ではスギ花粉症はない。これは北海道ではスギがほとんどないためだが、だからといって北海道に花粉症がないわけではない。札幌にはシラカバが多いため、シラカバ花粉で悩んでいる人が多い。夏にはイネ科の花粉症も多く、秋にはキク科の花粉症がある。アレルギーの発症はアレルギーの体質を持っていることが前提となるが、幼児期ではほとんどの場合ダニやハウスダストが原因。

ダニはカーペットやソファ、畳み、布団、枕などを住みかにするため、極力カーペットやたたみは排除し、掃除機をこまめにかけることが大切。布団は防ダニ二仕様のものにするのがおすすめ。住環境を整え、ホコリなどを排除するのが大切だ。いずれにしても鼻水が長引くのが症状がある場合は、素人判断せずに、耳鼻咽喉科に行く必要がある。

adviser

医療法人社団  
根本耳鼻咽喉科クリニック  
院長 根本 聡彦 先生



根本耳鼻咽喉科クリニック  
札幌市豊平区平岸4条14丁目2-3  
http://www.nemoto.or.jp E-mail: sathiko@nemoto.or.jp

## 細菌の検査で病原菌を特定することが治療の第一歩

急性副鼻腔炎は、鼻が詰まる、黄色い鼻水が出る、鼻水がどに降りるなどが主な症状で、初期には頭痛や目の痛み、咳などを伴う。風邪に引き続いて起こることが多い。病原菌が侵入したことで、菌をやっつけようと白血球が滲潤し、菌の死骸が膿汁となる。診断は綿棒などで膿汁をとって病原菌の検査をし、レントゲンで副鼻腔に影があるかを確認する。ただし、2歳以下の子どもの場合には上顎洞が発達していないため、レントゲンをとらない場合が多い。※レントゲンをとる年齢は先生の考え方によって異なる。

副鼻腔に溜まる病原菌は主に3種類あり、菌によって治療薬が違いため、細菌の検査が重要になる。まず、病原菌を知ることが副鼻腔炎の治療の第一段階だ。治療は、副鼻腔にたまった膿汁の排出と、感染の治療を目的とした経口治療が中心。通常であれば4回からの通院（根本耳鼻咽喉科クリニックの場合）で、だいたい2〜3週間で治癒する例が多い。

慢性の副鼻腔炎は副鼻腔炎の症状が1ヵ月以上続く場合をいう。適切ではない薬を漫然と飲み続け副鼻腔の炎症が悪化してしまう、アレルギー1症状があるなどその原因はさまざま。粘膜の炎症が長く続くため、粘膜がぶよぶよになり、粘膜炎が変化した鼻茸が見える



病気で大切なのは早期発見、早期治療。速やかに対応することで、治療期間も短くなる。

Q 中耳炎ってくせになりますか？

A そもそも子どもは風邪をひけば中耳炎になりやすいものなので、続けておきることもあります。毎回きちんと治療していれば多くの場合慢性に移行することはありません。鼻の治療が重要です。

Q 小児副鼻腔炎で手術をすることはあるの？

A 大人も子どもも含め鼻の手術自体減ってきています。乳幼児は手術の対象にはならないため小児副鼻腔炎で手術をすることはほとんどありません。大人でも昔のような顔面の骨をけずる手術をすることはありません。

Q 耳鼻科で小児副鼻腔炎と診断され抗生物質をもらいました

A たいていの場合、鼻水が治らないといった理由で耳鼻咽喉科を受診するケースが多いようです。悪化した状態で来院している場合は、副鼻腔の病原菌を特定し、速やかに排せつし、炎症を抑える必要があります。そのために抗生物質が必要となります。

Q 北海道の花粉症の時期はいつですか？

A 春はシラカバ花粉が最初に出現します。シラカバの同属種ハンノキは3月下旬から飛びはじめ、5月の連休すぎにシラカバのピークを迎えます。5月の下旬から6月の下旬にかけてイネ科のカモガヤ花粉が始まります。秋はヨモギ花粉が札幌では代表的です。誰もがすべての花粉症になるわけではなくシラカバだけの人もいます。春から秋すべての花粉に反応する場合もあります。症状の違いもあります。まず、自分がどの花粉に反応するかを検査することが重要です。それによって予防や症状の軽減が可能になります。